

history of eden

原

罪

と 現在

1

僕はアダム。
ここは、宇宙で唯一の水の星。
小さな、小さな楽園。
小さいけれど、僕達には十分だった。
だって、ここにいるのは、僕と彼女だけ。
他には、誰もいない。
それでも、僕達は幸せだった。

2

私はイヴ。
私は、彼と共に、この小さな、小さな楽園に生まれた。
私達は、自由だった。
けれど、たった一つだけ、禁じられていることがある。
それは、ある果実を食べること。
美しい色彩をもつ果実。
禁断の果実。
それだけは、何があっても、食べることは許されない。

3

樂園に住む僕達の頭上には、いつも巨大な、巨大な星があった。

それは、死の星。

水のない、枯れた星。

禁断の果実を食べると、僕達は樂園から、その巨大な、死の星に追放されてしまう。

けれど、僕には不安も不満もなかった。

美味しい果実など、他にいくらでもあるのだから。

4

美しい色彩の果実。

どんな味がするのだろう。

私は、ひそかに、それが気になっていた。

そしてあるとき、『悪魔』が現れ、私に囁いた。

「少しくらい食べたって、ばれやしないさ」

気が付くと私は、その果実にかじりついていました。

彼女は、僕にそれを見せた。
一口だけかじられた、禁断の果実。
美しい果実。

「なんてことを」

僕は彼女を責めた。

「ごめんなさい、だって、悪魔が私をそ
そのかしたの」

「悪魔だって？　ここには僕と君しかい
ないのかい？」

僕が声を荒げた、その瞬間。

輝いていた太陽が覆われ、世界は暗黒
に包まれた。

『神』が現れたのである。

「禁断の果実を食した罪により、お前たちを楽園より追放する」

『神』が私達に語りかけた。

「待ってください。私が果実を食べたのは、悪魔のせいです」

私は、必死で訴えた。

「悪魔など、私の創った楽園には、おらぬ」

その声と同時に、私たちを取り巻く世界に、大変動が起こった。

激しい地震。

そして、この星を覆っていた水が、上空に向かって、高く吹き上がっていく。

私達の身体もまた、ひきずられるように、上空に向かって浮き上がった。

浮き上がっているのではない、落ちているのだ。

僕はそれに気づいた。

頭上にいつもあった、巨大な、巨大な星。

死の星。

枯れた星。

そこに向かって、僕達は落ちているのである。

楽園の水もろとも。

奈落の底へ。

死の星に追放された私は、目を疑った。
上空に見えたのは、小さな、小さな星。
私達の楽園。

水の楽園。

それが、砂漠の星と化していた。

「どうしよう、私のせいで」

私は、泣きながら彼に打ち明けた。

「本当は、悪魔なんていなかったの。だ
って、楽園には私とあなたしかいない
のだから。悪魔は、私の中にいたの
よ」

そう言って泣きじゃくる私を、彼は優
しく抱きしめてくれた。

「僕達の罪は、消えることはない。でも、
償うことはできる。ここは楽園じゃな
い。だけど、生きよう。生きて償おう。
一緒に」

僕たちは、この枯れた大地の星を「地球」と名づけた。

そして、子孫を産んだ。

死の星に、新しい生命が宿った。

楽園から落ちてきた水は、この巨大な星を全て覆うには足りなかったけれど、海には海の生命が、大地には大地の生命が、生まれ、育ち、進化していった。

時は流れ、

僕達は伝説と化し、

僕達の楽園だった、小さな、小さな星は、

『月』と呼ばれ、

今夜もあなたが見上げれば、

『罪深き砂漠』が、そこにある。

(2009年、NASAは月にかけて水が存在したことを確認、発表した)

END